

縄文時代以降の気候変化が北海道の狩猟漁撈採集文化に与えた影響

山本正伸・櫻井弘道・関宰（北海道大学）

Impact of Climatic Change on the hunter-fisher-gathering cultures of Hokkaido since the Jomon Era. Masanobu Yamamoto^{1,2}, Hiromichi Sakurai², Osamu Seki^{2,3} (Hokkaido University)

北海道では、完新世から19世紀まで、人口密度の高い定住の狩猟漁撈採集社会が存続していた。本研究では、利尻島南浜湿原と別寒牛湿原の泥炭コアに含まれるミズゴケと維管束植物の遺骸のセルロース $\delta^{18}\text{O}$ 値を用いて、過去4400年間の北海道の古気候の変化を理解し、文化の発展に与える影響を考察した。セルロースの $\delta^{18}\text{O}$ 値は数百年および千年規模の変動を示し、利尻島では、4500～3400年、2800～2300年、700年以降の期間では温暖で湿潤な気候、約3000年および2200～1000年の期間では冷涼で乾燥した気候であり、別寒牛では、1200～300年の期間では温暖で湿潤な気候、1900～1300年および300年以降の期間では冷涼で乾燥した気候であったことがわかった。内陸部の文化圏の変遷は、夏の偏西風の緯度位置の変化に対応していた。一方、海洋狩猟民の文化圏の変遷は、対馬暖流の強さや沿岸の一次生産量の変化に対応していた。このことは、生活様式の異なる人類社会が、気候変動に対して異なる対応をしていたことを示唆している。

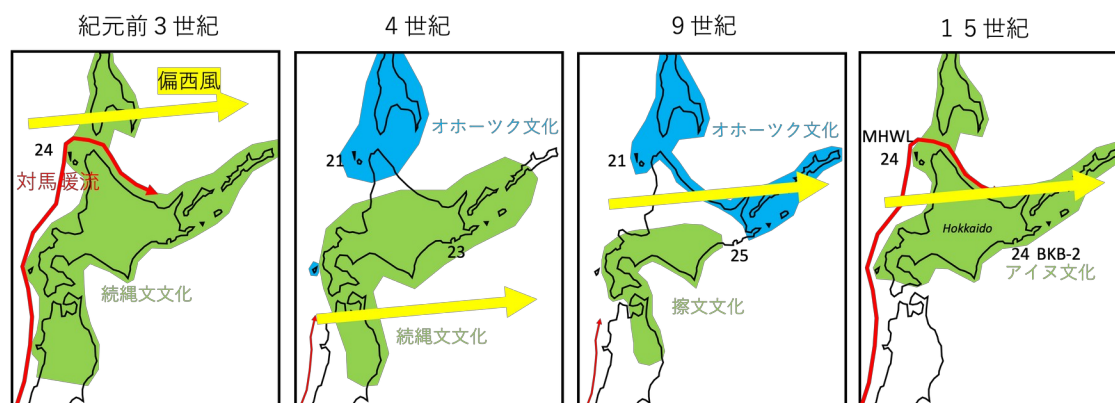


図. 縄文文化、オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化の分布 (Abe et al., 2016; Sakakida, 2016) と、夏季偏西風と対馬暖流の位置。数字はMHWLとBKB-2サイトのセルロースの $\delta^{18}\text{O}$ 値を示す。